

## 8 乳がん体験者の就労状況

### この章の要点

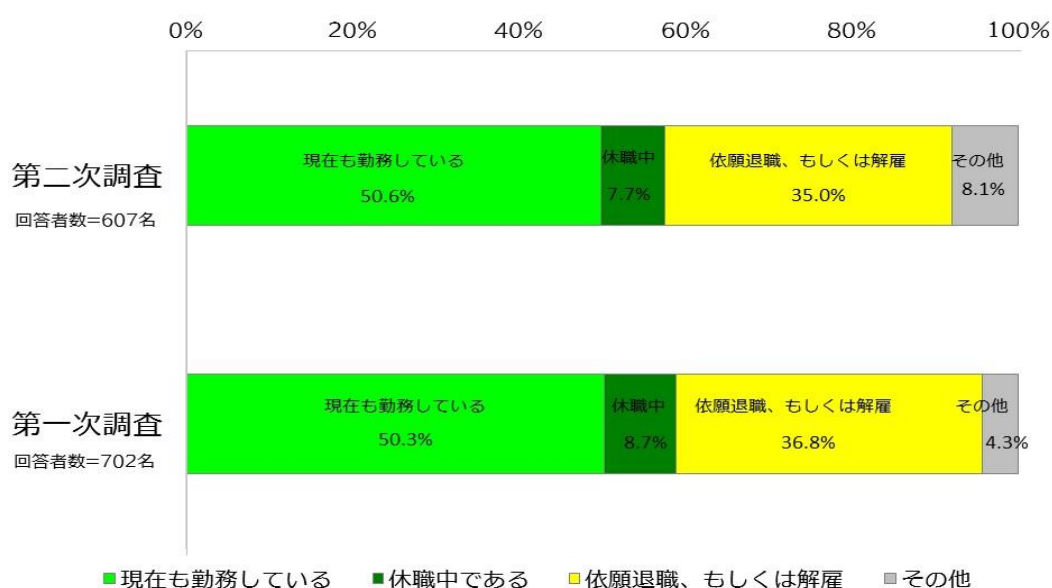
- 乳がんと診断後に、依願退職、もしくは解雇になった人の割合は、全体の 1/3 を占め、第一次調査、第二次調査でほぼ同じである。ただし、両調査間では、非正規雇用が、第一次調査では 17.5%、第二次調査では 24.5%と若干の差があり、雇用形態の変化が、依願退職や解雇に影響した可能性も考えられる。(P.64,P.66)
- がんになっても安心して仕事を続けるために必要だと考えることでは、就労環境の整備（制度）に関する項目が上位にあがっていた。第 1 位「勤務時間を短縮できる制度」、第 2 位「長期の休職や休暇制度」と、柔軟な勤務体制や長期間の休みが確保できる制度などが求められていた。(p.69)
- 第 3 位は、「がん・後遺症等についての仕事関係者の理解」があがっており、乳房切除や脱毛などの外見の変化、ホルモン薬による更年期障害様症状、吐き気やだるさなど周囲にはわかりにくい副作用症状、リンパ浮腫など、治療による症状や障害による日常生活行動の変化など人が気づきにくい部分での苦悩がみてとれる。(p.69)
- 診断時から現在まで仕事を継続できた一番大きな理由では、第 1 位は「上司や同僚、仕事関係の人々など周囲に理解や協力」で半数を占めていた。この結果は、全体の調査結果に比べ、「上司や同僚、仕事関係の人々など周囲に理解や協力」は 1 割近く高い。(p.70)
- 診断時から現在までの仕事に関する悩みでは、全体の調査結果の順位と少し異なり、「通院や治療のための勤務調整や時間休の確保」（全体順位は、第 3 位）が第 1 位であった。(p.74-p.75)
- 仕事を継続できなかった理由としては、「仕事を続ける自信がなくなった」、「会社や同僚、仕事関係の人々に迷惑をかけると思った」などが上位を占めていた。(p.76)

### (1) 乳がんと診断後の就労状況の変化：第一次・第二次調査結果比較

図 8-1、次ページ表 8-1、表 8-2 で示す通り、乳がん体験者においても、全体の調査結果と同じで、被雇用者も自営業者もがんと診断されてからの仕事の状況の変化は、第一次調査と第二次調査でほとんど変わらない結果となっている。

被雇用者（表 8-1）では、がんと診断後に、（がんにかかったことが直接の原因になっているかどうかは特定できないが）[依願退職、もしくは解雇になった人]の割合は、全体の 1/3 をしめ、第一次、第二次調査でほぼ同じである。

図 8-1 第一次調査と第二次調査 乳がん体験者就労状況の比較（被雇用者）



注)

10 年前も現在も全体数は少ないが、これはがんの罹患年齢から考えても高齢者が多く、被雇用者でも退職後の方も多いことが関係していると考えられる。職種の表(66 ページ)を参照。

表 8-1 仕事の状況の変化：被雇用者

お勤めの方	2013年 乳がん		2003年 乳がん	
	実数	(%)	実数	(%)
現在も勤務している	307	(50.6%)	353	(50.3%)
休職中である	47	(7.7%)	61	(8.7%)
依願退職した	188	(31.0%)	237	(33.8%)
解雇された	24	(4.0%)	21	(3.0%)
その他	41	(6.8%)	30	(4.3%)
回答者計	607	(100.0%)	702	(100.0%)

表 8-2 仕事の状況の変化：自営

自営、単独、家族従業者	2013年 乳がん		2003年 乳がん	
	実数	(%)	実数	(%)
現在も営業中である	72	(64.3%)	153	(69.2%)
休業中である	4	(3.6%)	16	(7.2%)
従事していない	11	(9.8%)	19	(8.6%)
廃業した	23	(20.5%)	28	(12.7%)
代替わりした	1	(0.9%)	1	(0.5%)
その他	1	(0.9%)	4	(1.8%)
回答者計	112	(100.0%)	221	(100.0%)

## (2) 職種

第一次調査に比べ、診断時のパート・アルバイトの割合が、17.5%(第一次調査)から24.5%(第二次調査)と高くなっている。また、全体の調査結果では、10.2%(第一次調査) < 15.7%(第二次調査)で、全体の調査結果に比べて、乳がん体験者は非正規雇用(パート・アルバイト)の割合が高い。第一次調査と第二次調査での差は、雇用形態の変化の影響があると考えられる。

表 8-3 職種：2013年 第二次調査

2013年(第二次調査)				
職業	診断時点の職業		現在の職業	
	実数	(%)	実数	(%)
自営業主	21	(1.6%)	17	(1.3%)
単独事業者	44	(3.5%)	40	(3.1%)
家族従業者	45	(3.5%)	29	(2.3%)
経営者,役員	13	(1.0%)	13	(1.0%)
民間企業の従業者	212	(16.6%)	131	(10.3%)
公務員	75	(5.9%)	40	(3.1%)
パート・アルバイト	312	(24.5%)	249	(19.5%)
内職	2	(0.2%)	5	(0.4%)
専業主婦	290	(22.7%)	391	(30.7%)
学生	2	(0.2%)	1	(0.1%)
無職	70	(5.5%)	176	(13.8%)
その他	27	(2.1%)	21	(1.6%)
無回答	162	(12.7%)	162	(12.7%)
計	1,275	(100.0%)	1,275	(100.0%)

表 8-4 職種：2003年 第一次調査

2003年(第一次調査)				
職業	診断時点の職業		現在の職業	
	実数	(%)	実数	(%)
自営業主	56	(2.9%)	37	(1.9%)
単独事業者	70	(3.7%)	57	(3.0%)
家族従業者	110	(5.8%)	84	(4.4%)
経営者,役員	27	(1.4%)	18	(0.9%)
民間企業の従業者	267	(14.0%)	156	(8.2%)
公務員	97	(5.1%)	78	(4.1%)
パート・アルバイト	333	(17.5%)	224	(11.8%)
内職	20	(1.1%)	8	(0.4%)
専業主婦	532	(27.9%)	691	(36.3%)
学生	1	(0.1%)	1	(0.1%)
無職	91	(4.8%)	240	(12.6%)
その他	38	(2.0%)	36	(1.9%)
無回答	262	(13.8%)	274	(14.4%)
計	1,904	(100.0%)	1,904	(100.0%)

### (3) 仕事の内容

表 8-4 は、仕事の内容を、診断時点と現在に分けて確認した結果で、上の表は 2013 年の第二次調査の結果、下の表は、2003 年の第一次調査結果である。

表 8-5 仕事の内容：2013 年 第二次調査

2013年（第二次調査）				
仕事内容	診断時点の仕事の内容		現在の仕事の内容	
	実数	(%)	実数	(%)
農林漁業	8	(0.6%)	7	(0.5%)
運輸・通信・保安職	4	(0.3%)	4	(0.3%)
生産工程作業従事者	53	(4.2%)	38	(3.0%)
サービス従事者	84	(6.6%)	52	(4.1%)
販売的職業	125	(9.8%)	78	(6.1%)
事務的職業	201	(15.8%)	152	(11.9%)
管理的職業	12	(0.9%)	12	(0.9%)
専門的職業	158	(12.4%)	124	(9.7%)
その他	82	(6.4%)	81	(6.4%)
無回答	548	(43.0%)	727	(57.0%)
計	1,275	(100.0%)	1,275	(100.0%)

表 8-6 仕事の内容：2003 年 第一次調査

2003年（第一次調査）				
仕事内容	診断時点の仕事の内容		現在の仕事の内容	
	実数	(%)	実数	(%)
農林漁業	17	(0.9%)	14	(0.7%)
運輸・通信・保安職	7	(0.4%)	6	(0.3%)
生産工程作業従事者	110	(5.8%)	56	(2.9%)
サービス従事者	128	(6.7%)	82	(4.3%)
販売的職業	152	(8.0%)	102	(5.4%)
事務的職業	269	(14.1%)	184	(9.7%)
管理的職業	18	(0.9%)	15	(0.8%)
専門的職業	179	(9.4%)	141	(7.4%)
その他	89	(4.7%)	72	(3.8%)
無回答	935	(49.1%)	1,232	(64.7%)
計	1,904	(100.0%)	1,904	(100.0%)

### 注意点

- (4)以降は、第一次調査時はなかった質問である。そこで、第二次調査全体の調査結果（表には【全体】と表示）と乳がん体験者の結果（表には、【乳がん】と表示）を比較する形で表を作成している。
- 就労状況に関して、無回答は除き、回答者計を母数にして集計表を作成している。これは、被雇用者と自営業者に分けて質問している項目が多いこと、全ての方が就労しているわけではないことのためである。

#### (4) 乳がんと診断時の仕事に関する思い

[乳がんと診断されたときに、仕事に関してどう思ったか]に関して、乳がん体験者のほぼ半数が「仕事をこれまで通り続けたい」（345名：52.4%）と思い、第2位の「以前よりペースや業務量を落として仕事を続けたい」（154名：23.4%）とあわせると、2/3の乳がん体験者が何らかの調整をしながらも仕事を続けたいと思っている。これは、がん体験者全体の傾向と同じである。

表 8-7 がんと診断された時の仕事に関する思い

仕事への思い	2013年 乳がん		2013年 全体	
	実数	%	実数	%
仕事をこれまで通り続けたい	345	(52.4%)	1,022	(54.4%)
以前よりペースや業務量を落として仕事を続けたい	154	(23.4%)	411	(21.9%)
仕事を辞めたい	97	(14.7%)	219	(11.7%)
仕事のことは考えなかった	37	(5.6%)	168	(8.9%)
その他	25	(3.8%)	58	(3.1%)
回答者計	658	(100.0%)	1,878	(100.0%)

注) 無回答を除き、集計した。

## (5) がんになっても安心して仕事を続けるために必要な支援

[がんになっても安心して仕事を続けるために必要なこと]の上位には、就労環境の整備（制度）に関する項目があがっていた。具体的には、「勤務時間を短縮できる制度」（第1位）、「長期の休職や休暇制度」（第2位）、「柔軟に配置転換できる制度」（第5位）、「再雇用の制度」（第6位）などがある。

これらを求める背景には、仕事復帰する場合の体慣らしや、通院や治療を続けながら仕事をする場合の仕事と治療（通院）との調整、長期化する症状や後遺症による生活行動への影響などがあると考えられる。

第3位には、「がん・後遺症等についての周囲の理解」（402件）があがっている。この背景には、一つには、眼には見えないつらさ—たとえば、リンパ浮腫で弾性スリーブを着けていること、治療に伴うだるさや吐き気、温度や湿度の変化により痛む傷痕、ほてりやのぼせなどのホルモン療法による更年期障害のような症状など—をわかってもらえないこと、がんに対する偏見（がん＝死など、がんに対するマイナスイメージ）などがあると考えられる。

就労に関する制度の改正（変化）だけではなく、一般の人々のがんに対する偏見をなくし、がんという病気や治療による変化などを理解してもらおうという啓蒙が必要と考える。一方、がん体験者自身も、周囲に伝え、理解してもらおう、あるいは調整するという行動が必要となる。そこで、がん体験者が、自らが行動を起こせるような支援（相談、カウンセリング等）もまた重要といえる。

図8-2 がんになっても安心して仕事を続けるために必要だと考えること

(回答者 609名)



#### (6) 診断時から現在まで仕事を継続した場合:仕事を継続できた一番の理由

上位には、「人間関係」(ソーシャルサポート)に関する項目があがっており、がん体験者だけの努力ではなく、周囲の人々によるサポートの重要性が示唆された。職場や仕事関係者(フォーマルな関係)の理解や支援だけではなく、インフォーマルな関係(家族や友人など、制度や形式に基づかない非公式な関係性)の支えが、仕事継続につながっていると考えられる。

全体の調査結果と乳がん体験者の結果を比較すると、項目ごとの順位は同じであったが、乳がん体験者はよりフォーマルな関係である職場や仕事関係者の理解や支援を、継続の大きな理由ととらえていた。

また、3番目には、自らの努力(13.0%)があがっており、仕事を継続する上で、がん体験者自身も努力し行動していた。

表 8-8 仕事を継続できた一番の理由

仕事を継続できた理由	乳がん		全体	
	人数	(%)	人数	(%)
上司や同僚、仕事関係の人々など 周囲の理解や協力	167	(52.8%)	415	(44.3%)
家族など会社以外の人々の支え	44	(13.9%)	209	(22.3%)
自らの努力(専門的な知識や技術)	41	(13.0%)	131	(14.0%)
会社や社会の制度	38	(12.0%)	87	(9.3%)
その他	26	(8.2%)	95	(10.1%)
回答者計	316	(100.0%)	937	(100.0%)



(7) 事業主もしくは仕事関係者からの理解や支援の状況

【診断時】

a) 仕事に関する相談相手

乳がん体験者では、がんと診断された時点での仕事に関する相談相手の第1位は「家族」(61.9%)である。今後に関して、まだ不確定要素が多いこと、経済面にもかかわってくるなどから、まず家族に相談したり、家族の意見を聞いたりしたのではないと思われる。以下、「上司」(58.6%)、「同僚」(35.4%)と会社関係者が続いている。

職場の産業医や産業カウンセラー、社会福祉の専門家である医療ソーシャルワーカー、がん専門相談員、社会保険労務士など、相談窓口、あるいは就労に関する専門的な知識を持つ専門職種への相談は1-2%にとどまり、現状では、就労に関しては十分に活用されていない可能性がある。

全体の調査結果と乳がん体験者の結果を比較すると、全体的な傾向は類似しているが、「家族」に相談した割合は、全体の結果では7割であるが、乳がん体験者は6割と若干低めである。

表 8-9 診断時、仕事に関して相談した相手 (複数回答)

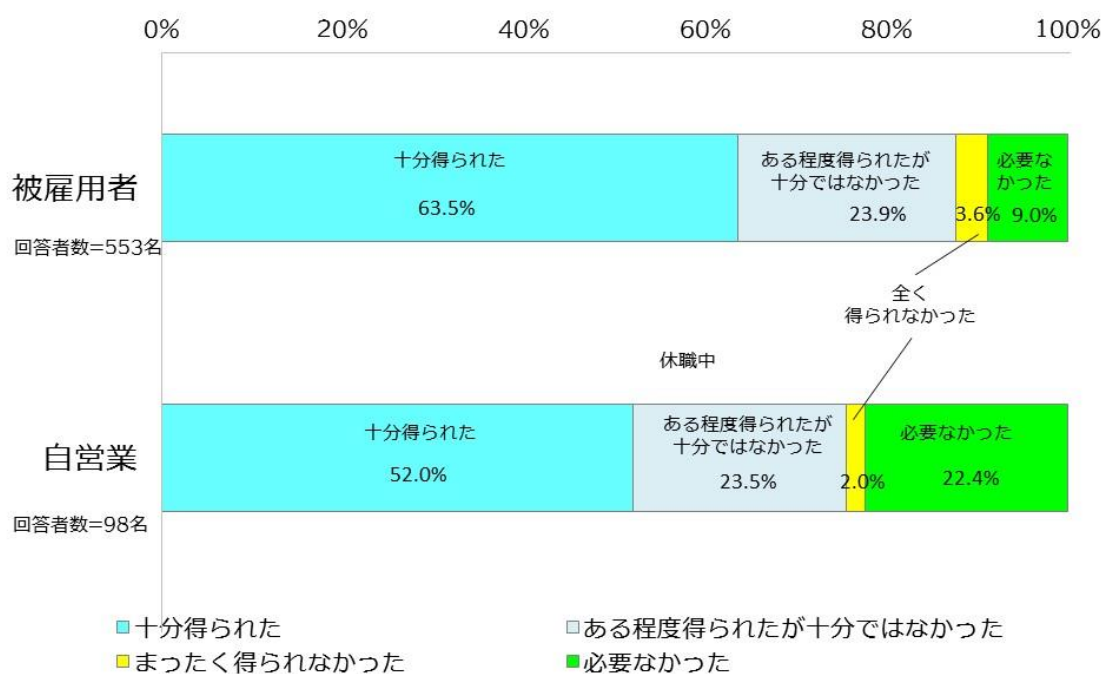
仕事に関しての相談相手	乳がん		全体	
	実数	(%)	実数	(%)
家族	410	(66.9%)	1,226	(71.1%)
上司	359	(58.6%)	865	(50.1%)
同僚	217	(35.4%)	501	(29.0%)
主治医 (医師)	127	(20.7%)	354	(20.5%)
人事労務担当者	34	(5.5%)	109	(6.3%)
同病者 (患者団体などの会員含む)	26	(4.2%)	43	(2.5%)
職場の産業医、産業カウンセラーなど	7	(1.1%)	28	(1.6%)
医療ソーシャルワーカー	12	(2.0%)	27	(1.6%)
がん専門相談員	16	(2.6%)	27	(1.6%)
社会保険労務士	4	(0.7%)	14	(0.8%)
その他	25	(4.1%)	66	(3.8%)
回答者計	613		1,725	

## b) 仕事関係の人々からの理解や支援の状況

がんと診断された当時の事業主、あるいは仕事関係者からの理解や支援は、「十分得られた」、「十分ではなかったがある程度は得られた」とあわせると、8割前後の乳がん体験者は、理解や支援は得られたと回答している。

一方、自営業の場合は、「必要なかった」(22.4%)とする割合が、被雇用者の倍近くある。設問をどのように理解し回答したかにもよるが、周囲からの理解や支援の二ーズの種類、必要とされる内容、時期などは、被雇用者と自営業では異なる可能性がある。

図 8-3 がんと診断された当時、事業主、もしくは仕事関係者からの理解や支援



【現在、仕事に従事している人】

a) 仕事に関する相談相手

がんと診断されてから現在までに、仕事に関して相談した相手を下記に示した。

乳がん体験者の結果と全体の調査結果は、同じような傾向がみられ、診断時と同様、一番の相談相手は、「家族」（乳がん体験者 65,7%、全体 70.2%）。その一方で、人事労務担当者、社会保険労務士、医療ソーシャルワーカー、産業医や産業カウンセラーなど専門的な職種への相談は、5%以下にとどまっており、診断時同様、あまり活用されていない。

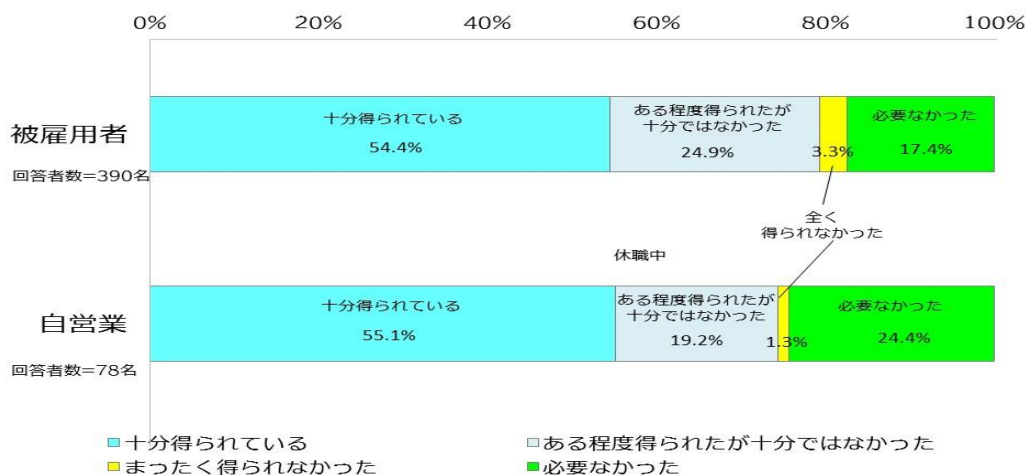
表 8-10 診断時から現在までに仕事に関して相談した相手 (複数回答)

相談した相手	乳がん		全体	
	実数	(%)	実数	(%)
家族	260	(65.7%)	769	(70.2%)
上司	182	(46.0%)	440	(40.2%)
同僚	134	(33.8%)	304	(27.8%)
主治医（医師）	74	(18.7%)	215	(19.6%)
同病者（患者団体などの会員含む）	44	(11.1%)	82	(7.5%)
人事労務担当者	19	(4.8%)	46	(4.2%)
がん専門相談員	14	(3.5%)	29	(2.6%)
医療ソーシャルワーカー	15	(3.8%)	28	(2.6%)
職場の産業医、産業カウンセラーなど	5	(1.3%)	21	(1.9%)
社会保険労務士	2	(0.5%)	7	(0.6%)
その他	22	(5.6%)	60	(5.5%)
回答者計	396	(100.0%)	1,095	(100.0%)

b) 仕事関係の人々からの理解や支援の状況

がんと診断されてから現在までの事業主、あるいは仕事関係者からの理解や必要な支援の状況をみていくと、ほぼ診断時と同じ傾向がみられた。

図 8-4 現在の事業主、もしくは仕事関係者からの理解や支援の状況



## (8) 仕事に関する悩みや負担

### a) がんと診断された当時の仕事に関する悩みや負担

がんと診断されたときに、仕事に関して悩んだことでは、4割が「仕事の調整」、「仕事復帰の時期」、「仕事を辞めるかどうか」をあげている。

また、全体の調査結果と乳がん体験者の結果を比較すると、類似した傾向ではあるが、「職場の上司や同僚、取引先への説明の仕方」は全体の結果より1割近く多い。雇用形態をみていくと、全体の結果では、非正規雇用（パート・アルバイト）は15.7%、乳がん体験者の非正規雇用は24.5%と10%近く差があることから、正規雇用と非正規雇用で、悩みが一部異なっている可能性も考えられる。

いつ頃仕事に復帰できるのかは、がんの場合は不確定要素が強い。今後どのような治療になるのか、治療にはどのくらいの期間がかかるのか、入院治療なのか通院治療なのか、治療により身体的にどのような影響がでるのか、それは徐々に軽くなるものなのか、不可逆的なものなのか、治療が終わったあとの通院はどのような間隔で行われるのかなど、多くの事柄が不確定である。このことは、第1位の「仕事の調整」にも影響すると考えられる。

また、仕事ができるかどうかにも関係してくるが、第5位には「経済的な問題」があがっている。自営業の場合は、「手当や保障がない」こともあり、仕事に関する悩みは、経済的な問題、悩みや負担とも影響しあう項目である。

表 8-11 がんと診断された当時、仕事に関して悩んだこと (複数回答)

仕事に関して悩んだこと	乳がん		全体	
	実数	(%)	実数	(%)
仕事の調整	288	(45.2%)	723	(40.7%)
仕事復帰の時期	267	(41.9%)	770	(43.4%)
仕事を辞めるかどうか	253	(39.7%)	624	(35.2%)
職場の上司や同僚、取引先への説明の仕方	213	(33.4%)	419	(23.6%)
経済的な問題	203	(31.9%)	582	(32.8%)
職場の事務手続き（休職手続き、傷病手当など）	135	(21.2%)	363	(20.5%)
仕事（顧客）の引き継ぎ	60	(9.4%)	202	(11.4%)
手当や保障がない（自営業）	27	(4.2%)	125	(7.0%)
顧客の減少（自営業）	20	(3.1%)	92	(5.2%)
その他	13	(2.0%)	39	(2.2%)
回答者計	637		1,775	

b) 診断時から現在まで仕事に関する悩みや負担

診断時から現在までの仕事に関する悩みでは、乳がん体験者の場合、一番多いのは、全体の結果では3番目に多かった通院や治療のための勤務調整や時間休の確保」である。前述のがんになっても安心して仕事続けるために必要だと思うことの回答でも、第一に、「病状に合わせて勤務時間を短縮できる制度」、次に「長期の休職や休暇制度」があがっており、治療を継続しながらの仕事復帰、あるいは治療終了後の定期通院を続けながら仕事復帰しても、定期的な通院や通院治療で休むことの難しさがあるのではないかと考えられる。

治療のある日は、待ち時間も含めると1日がかかりという声もよく聞かれ、治療の翌日は体調が悪くとも仕事はできないという場合もある。しかし、仕事を続けることは、地に足がついているという感覚（社会の中にいる自分、社会の中で役割を果たしている自分）の実感というメリットを感じる場合もある。治療スケジュールの調整、体調の調整、仕事の調整などは、自分一人では難しく、医師など医療関係者、仕事関係者など治療や仕事にかかわる人々への相談や情報提供などの働きかけも必要になる。

表 8-12 診断時から現在までの仕事に関する悩み (複数回答)

仕事に関して悩んだこと	乳がん		全体	
	実数	(%)	実数	(%)
通院や治療のための 勤務調整や時間休の確保	224	(50.2%)	481	(40.0%)
病気の症状や治療による 副作用や後遺症による症状	200	(44.8%)	499	(41.5%)
体力の低下	195	(43.7%)	571	(47.5%)
外見の変化	178	(39.9%)	303	(25.2%)
仕事復帰の時期	143	(32.1%)	392	(32.6%)
経済的な問題	129	(28.9%)	379	(31.6%)
病気の症状や治療による 副作用や後遺症への対処方法	102	(22.9%)	264	(22.0%)
職場の上司や同僚、取引先への説明の仕方	77	(17.3%)	164	(13.7%)
職場の事務手続き (休職手続き、傷病手当など)	64	(14.3%)	140	(11.7%)
職場（仕事先）でのがんに対する偏見	52	(11.7%)	97	(8.1%)
職場でのコミュニケーション	49	(11.0%)	117	(9.7%)
再就職できるかどうか	44	(9.9%)	105	(8.7%)
仕事（顧客）の引き継ぎ	23	(5.2%)	82	(6.8%)
手当や保証がない（自営業）	16	(3.6%)	104	(8.7%)
予期せぬ部署異動・職場異動	14	(3.1%)	32	(2.7%)
顧客の減少（自営業）	13	(2.9%)	58	(4.8%)
その他	15	(3.4%)	46	(3.8%)
回答者計	446		1,201	

(9) 診断時から現在までに仕事を辞めた場合

a) 離職までの期間

乳がん体験者の離職までの期間では、直後から1ヶ月未満では6名(2.9%)であるが、直後から3ヶ月未満までの期間で見ると、がんと診断されてから早い時期に3割近くが仕事をやめている(66名: 32.3%)。そのなかでも、全体と比べると、1ヶ月未満は若干少なく2ヶ月は若干多い傾向にある。

表 8-13 離職までの期間

離職までの期間	乳がん		全体	
	実数	(%)	実数	(%)
直後～1ヶ月未満	6	(2.9%)	31	(5.6%)
1ヶ月	37	(18.1%)	86	(15.6%)
2ヶ月	23	(11.3%)	47	(8.5%)
3ヶ月～半年未満	26	(12.7%)	62	(11.3%)
半年～1年未満	22	(10.8%)	72	(13.1%)
1～3年未満	40	(19.6%)	128	(23.3%)
3～5年未満	14	(6.9%)	42	(7.6%)
5～10年未満	19	(9.3%)	53	(9.6%)
10年～20年未満	13	(6.4%)	25	(4.5%)
20年以上	4	(2.0%)	4	(0.7%)
回答者計	204		550	

b) 仕事を継続できなかった理由

仕事を継続できなかった理由は、「仕事を続ける自信がなくなった」(41.7%)が一番多く4割を占めた。次に「会社や同僚、仕事関係の人々に迷惑をかけたと思った」(33.3%)があがり、「治療や静養に必要な休みをとることが難しかった」(23.1%)と続く(表 8-14)。全体の結果とほぼ同じような傾向がみられる。

表 8-14 仕事を継続できなかった理由 (複数回答)

仕事を継続できなかった理由	乳がん		全体	
	実数	(%)	実数	(%)
仕事を続ける自信がなくなった	90	(41.7%)	216	(36.6%)
仕事関係の人々に迷惑をかけたと思った	72	(33.3%)	170	(28.8%)
治療や静養に必要な休みをとることが難しかった	50	(23.1%)	135	(22.9%)
もともと辞めるつもりだった	21	(9.7%)	79	(13.4%)
辞めるよう促された、もしくは 辞めざるを得ないような配置転換をされた	17	(7.9%)	48	(8.1%)
解雇された	12	(5.6%)	32	(5.4%)
その他	65	(30.1%)	174	(29.5%)
回答者計	216		590	